

ファイルD「分析の方法と考察の道具（概念）を求めて踏査（探査）した拙稿から」

## ◆ 15種の拙稿への案内◆

D-1 「人口減少による地域と社会の変化と学校教育の課題と可能性～カリキュラム・マネジメントの潜在力を拓く～」

D-2 「教科からみる高校教育改革の課題」

D-3 「新学習指導要領が描く授業者の情景」

D-1～3は、公益財団法人中央教育研究所（谷川彰英理事長）の二つの研究プロジェクトによる報告書に掲載された拙稿です。D-1は谷川理事長が主催するプロジェクト「人口減少と学校教育」の2冊目の報告書『人口減少問題と教育実践』（研究報告No.95 2019年9月）冒頭の論です。D-2とD-3は、研究所の武内清理事主催のプロジェクト「学校教育に関する調査研究」の報告書『高校教員の教育観とこれからの高校教育』（研究報告No.92 2018年12月）第7章の本文（D-2）と補論（D-3）です。

D-1はファイルC・付論2の展開例として、新学習指導要領のカリキュラム・マネジメント論に注目し、人口減少時代の教育課程策定条件と授業づくりモデルを構想しました。

D-2は高校教員の担当教科・科目別に新学習指導要領の認知度の現状分析と実践化への課題について、調査データを用いて考察しました。その新学習指導要領の特性の図示化による解説がD-3です。

D-4 「なぜ静岡は小学校が低く、中学校が高いか：学力調査の及ぼした影響に関する研究(3)  
～沖縄・静岡の状況から～」

D-5 「少子高齢・人口減少社会を支える子を育む生活科・総合的な学習の時間の課題VI  
ー小学校第5学年『橋が流された』の実践を通してー」

D-4は日本子ども社会学会第27回大会（2019年6月）、D-5は全国生活科・総合的な学習教育学会第24回全国大会の発表用PPPのPDF版です。静岡大学在職時から授業づくりの実践研究を共にしてきた静岡（馬居の研究室卒業生と修士課程修了の現職教員）と秋田（90年代生活科活動実践と00年代秋田県内教員調査で出会って以来の研究者と教員）の友人との共同発表です。

次にD-5ですが、VIとあるように静岡大学在職時に研究室の学生と上記友人（研究室先輩現職教員）との協働で、10年を超える生活科、社会科、総合的な学習の時間を中心に全教科による合科指導を志向した授業づくりの記録から選んだ実践記録です。そして、静岡と秋田の友人との実践研究は退職後の今も継続中です。

D-4の発表PPTに描かれた教員配布資料やレポートは彼らが提供してくれました。コロナ休校期間の聞き取りと資料収集の最も重要な調査協力者になってくれました。その意味で、数値化が困難な学校と授業の現場のリアルを感得する貴重な資料・データとして、D-4、D-5が活用されることを願っています。

D-6 「テレビドラマが描く教師像の変遷にみる学校教育の虚実」

D-7 「今、人気を誇る『ONE PIECE』の魅力」

D-8 「『命の大切さ』を育む教育のための三つのステップ」

D-6の初出は金子書房の月刊誌『児童心理』2019年3月号、D-7も『児童心理』2016年12月号、D-8は静岡県出版文化会の季刊誌『教師の広場』2013年6月号の掲載が初出です。いずれも編集部依頼されたテーマ（表題）に応じて私見を書き込んだ小論です。

最も新しいD-6では、教員と教師の間（あいだ）を問い直す観点から、金八先生（武田鉄矢）、ヤンクミ（仲間由紀恵）、鈴木先生（長谷川博己）が心を砕く人たち（生徒や児童の衣を着けた）の姿と語りかける言葉から、18歳人口・小中在校生数（1学級平均人数）・出生数の増減、高等教育進学率の推移、背後の高度成長後半以後の日本社会の変動の中を生かされる子どもたちの日常と受験学力優先期に入った学校・教員のルール・言葉のぶつかりが生む現実の診断と処方箋を読み取って、図表と文字で綴ってみました。

その3年前(2016)に書いたD-7では、“麦わらの一味”に模して、リーマンショックによる氷河期を超えて、単行本国内発行部数1位(3億2千万部以上)達成の秘密を探し、全巻読破の旅にでました。絵と吹き出しと文字と独自の記号の予期せぬ組合せによって、次々と生成されるヒト、モノ、コトの栄枯盛衰が精緻に描かれる、ONE PIECEの時空を堪能することができました。と同時に、まさにその堪能の淵源に、新指導要領が説く「主体的、対話的、深い学び」の秘密を解くカギが隠されていることを感得・・・できたことを示唆する構成での執筆を試みました。

そのまた3年前(2013)に執筆したD-8では、90年代生活科誕生期に、全国の小学校で生活科の授業(活動)の創造に挑まれる先生方から学んだことを、“「命の大切さ」を育む教育”というテーマを活用して、20数年を経た時空を生きる子どもたちと先生方へのメッセージとなることを願って表現してみました。

この三種の拙稿のなかに、C-2に記した日本の学校教育の優位性と脆弱性の而二不二の関係、C-3に描いた授業づくりの構造図作成の道具(概念)を探してみてください。

なお、D-6とD-8の表題右上にあるColumn8-3-2、Column8-3-1は、『人口減少時代の家族・学校・地域・社会～生涯にわたる学びと教えの新たな可能性を求めて～』(馬居政幸・角替弘規共編著 NSK出版 2020年1月)の第8章3節の末尾に、上記初出の拙稿に加筆修正を施して掲載したcolumnの意です。またD-2は同書の第8章2節の本文の展開に活用しました。参照ください。

D-9「原点から問い直す生活科の未来2-誕生期の活動で学んだこと」

D-10「新学力観で学校が変わる」

D-11「新しい子どものとらえ方・生かし方(社会学の立場から)」

D-12「『楽しい学校』-21世紀の学校像を求めて-」

D-13「日本における公民教育の成立と展開-日韓社会科教育比較考(その2)-」

D-9～13は、いずれも90年代に執筆した拙稿です。上記D-8でも述べましたが、1989年告示の小学校学習指導要領によって新設された生活科誕生期に、文部省の伝達講習会や指導資料作成に関わる専門委員を経て、全国各地の生活科の活動実践の場に参加し、目の前で生じるリアルな事象の変化を読み取る視座の多元性(見、観、診、看)を感得できました。幸いにも、この“4種のみる”を代表に、子どもと教員の声、身振り、表情、心の動き(推察)、これらの相互の関わりから生じる変化と変異の意味を感得する五感の働き(直観!)の記録に基づく拙稿を、リアルタイムで教育情報誌等に提供し、授業(活動)分析録として残すことができました。そして20年を超す時を経て、表題の観点から選別した小論集に加筆修正を施し、研究論文として静岡大学教育学部研究報告(教科教育学篇)第45号(2014年3月)に発表したのがD-9です。これが2014年発刊の理由ですが、いずれも初出は90年代の教育情報誌です。

同様にD-10は、90年代半ばに、静岡県内公立小学校から学校づくりのアドバイザーを依頼され、変化する学校と教師の日々の記録を私なりの視座から再構成する過程において、学校観、教師観、授業観、そして学力観、知識観、評価観の再定義に挑んだ論考です(第2章3節『1新しい学力観 シリーズ・現代の教育課題に挑む』所収 下村哲夫編 ぎょうせい 1996年4月)。

また、生活科と学校づくりへの参加で得た、子どもと教員の関係の転換と背景となる少子化による生き場の变化の要請を組み込む、新たな評価観の提示を試みたのがD-11です。(第2章3節『新学力観のための評価と指導 第1巻 評価で子どもを育てる』所収 藤岡完治 北俊夫編 ぎょうせい 1997年5月)

そして、D-12は表題(書名)に示すように、「新しい学力観」とマスコミが名付けた生活科に始まる教育改革の方向を捉え返す試みとして、「楽しい学校」研究会(代表・馬居政幸)による研究成果と中野重人先生、山中正和先生、坂本昇一先生、富田富士也先生、藤田英典先生、深谷昌志先生との対談によって構成される編著書です。(『学校経営』1月号臨時増刊 1998年 第一法規)。

D-13は、1995年8月8日、韓国のソウル大学校において、韓国社会科教育學會の主催で開催されたシンポジウム「東アジアの市民(公民)教育の成立と展開(The Development of citizenship Education in East

Asia)」にパネリストとして招待され、「日本における公民教育の成立と展開」をテーマに発表するために提出した小論に加筆し、副題に示す「日韓社会科教育比較考(その2)」として、『静岡大学教育学部研究報告(教科教育学篇)』第27号(1996年3月)に発表した論考です。その意味で、D-9～11とは執筆の理由が異なりますが、シンポジウム開催年が示すように、執筆時期は重なります。その記述も、1989年版学習指導要領に発する「新しい学力観」との名称で総括される教育改革に至る経緯を、日本における社会科の成立と変遷に重なる構成により、私なりに位置付けた試論ですが、1990年代までの変遷史であることをご容赦ください。

以上の案内から理解されると思いますが、上記5種は全て「新学力観」と略称される90年代の教育改革の流れに竿をさしての執筆による論考です。その意味で、本サイトでの調査研究と授業づくりの構造分析に用いた視座と手法の獲得の原点となる時空です。しかし、静岡大学退職後に復帰した教育社会学の発表の場で、新学力論は新自由主義というラベルによって批判(無視)の対象になっていることに違和感を持ちました。その意味では、本サイトでの記述との関わりも含めて、D-9～13のどの表現が新自由主義のラベルで排除すべきかをご教示いただけることを願っています。

#### D-14「未来社会につなぐ! 現代社会の課題と社会科授業デザイン」 社会科教育連載1～12

静岡大学退職後に、表題のテーマでの1年間の連載(『社会科教育』明治図書 2016年4月号～2017年3月号 連載1～12回)を依頼されての論考です。その意味で、D-13執筆後の静岡大学教育学部在籍時における教育(社会科の教員養成)と新たな課題(少子化、高齢化、人口減少)による全国各地の現場に参加しての調査研究の蓄積を踏まえて、所属集団を離れた視座から、実証の手法が届く「学校」と「家族」、居住の場としてのみ把握可能な「地域」、法制度や慣習・規範による時間軸に制約されるが流動化する空間軸からは変異を迫られる「社会」を視野において、社会科の教材化のための素材となることを目的に、連載を開始しました。しかし、結果としては“幸いにも”となりますが、学習指導要領改訂のための「論点整理」と「審議のまとめ」がネット上に公開される次期と重なったために、新指導要領を準備するテーマを考慮した連載になりました。その結果、意図したわけではありませんが、1989年告示の学習指導要領実施時期までを対象にしたD-13から20年以上の時空の変容を、学習指導要領改訂に至る経緯を未来への射程の視座から問い直すことができました。加えて、少子化、高齢化、人口減少の考察には、日本の統計資料において最も信頼されるデータである人口の推移と推計を活用できます。そのため、紙幅の制約を超えるデータ処理と表現様式により、これまでの連載で最も高密度の情報の作品を読者(全国の社会科教員)に提供できました。ただし、現時点で4年前のデータによる連載ですので、最新のデータへのアプローチの視点と手法の手がかりとして参考にしていただくことを願っています。

#### D-15「知識社会学」再考(1)

最後にD-15は、『静岡大学教育学部研究報告(人文・社会科学篇)』第32号(1982年3月)に発表した論考です。発刊年が示唆するように、大学院時代から静岡大学に赴任した時期に、修士論文の延長での思考を科学方法論のレベルでの整序を試みた若き日の小論です。それを本サイトファイルDの末尾に収めたのは、この小論で展開したK. マンハイムのイデオロギー解釈 Ideologiebegriff、M. ヴェーバーの価値自由 Wertfreiheit、P. L. バーガーの知識社会学 sociology of knowledge が、本サイトを準備した考察の原点になると判断したからです。現場から読み取る方法の原点が90年代の生活科創設期にあるように、事象の意と構成の仕組みを読み取る思考の原点を提示し、本サイトの記述の実証科学としての妥当性の判断の参考にさせていただくことを願っています。